

年末に信じられないことが

起きました。福島第一原発の南二十二キロに位置し、震災後も休業や移転をせずに奮闘してきた高野病院(福島県広野町)＝写真＝の高野英男院長(左)が、三十日に火災で亡くなられたのです。

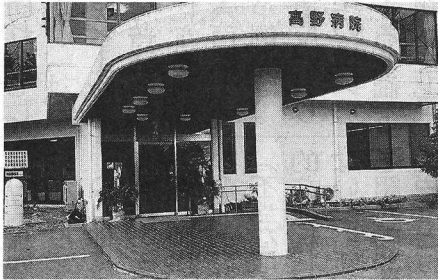
南相馬市原町区出身。眼科医の家庭に生まれ、「人間が好き」とのことで哲学的に精

東北復興日記



▶▶▶ 204

まだまだ



ベテランママの会代表
番場さち子さん



過疎地の医療 未来考える

神を診る医師になられ、頭脳明晰めいさくの上に温厚で柔和、人徳もある先生でした。医療過疎の広野町で一九八〇年に開業し、地域医療を支えてきました。震災後も広野町を含む双葉郡唯一の病院として、常勤医は本人のみで続けていました。疲れはピークをとうに過ぎていたと思います。

院長の次女で理事長を務める高野己保さんと、原発から北に二十二キロの南相馬市に住む私とは、三年前にフェイスブックで知り合いました。二〇一三年のクリスマスには私が運営する塾の子どもたち

に、お菓子とジュースを届けたいいただき、復興を生き抜く同志、姉妹のような気持ちで励ましあってきました。己保さんは、火事の翌日「百一人の入院患者さんと従業員をなんとか守ってください」と広野町の遠藤智町長に訴えました。ただちに同町から南相馬市に応援要請があり、南相馬市立総合病院の金澤幸夫院長が快諾し、大みそかには院長自ら宿直を引き受けました。同病院の若手医師たちも立ち上がりました。

年始三日には広野町役場で遠藤町長、「高野病院を支援する会」の尾崎章彦医師、坪倉正治医師が記者会見。町長が会の代表に就いて町として全面的に高野病院を支援し、ボランティアで入る医師の宿泊・交通費の支給も発表されました。首都圏から寄付や支援をしたいという声も続々と町に届いているそうです。これは単に原発被災地、人口五千人の小さな町の病院に限った話ではありません。全国の過疎地域に起きうる医療の未来を左右する出来事なのです。

※この連載は、東京のNPO法人JKSKと、被災地の女性たちが協力して復興に取り組む「結核プロジェクト」の協力を得て、掲載しています。